

私の古典学習法

日展会員 本誌審査委員 岩永 栖邨 〈前編〉

古典は思いの架け橋



この執筆依頼を頂いた時、特にこれと
いう古典研究をしている訳でもなく、特
別工夫した古典学習法を行っているので
もないのに、さて如何したものかと窮し
ました。ならば古典学習の意義、作品制
作の古典活用法などについて書かせても
らおうと思ひ筆を執りました。偏った思
いの雜駁な文ですが、ご一読ください。

一 書展に行こう

書道が好きな皆さんは、時々書道展を見学
に行かれることがあると思います。そして訪
れた会場を廻っていると、「はっ！」と目を
引く作品に出合うことがあります。作品
展覧会図録や作品集を見ていても、「うま
い！」「なるほど！」と感心するような作品

を目にすることがありますね。

注目する作品に出合うと、どなたが書いた作品なのかが気になります。加えて、この作品のベースにある古典（古筆）は何なのだろうかと探ってみたくなります。

私は専ら「かな」を書いていますので、

展覧会場では主に「かな」作品を見て廻りますが、総じて私が目を引かれる作品は書作の



第9回日展会場風景（写真提供：公益社団法人日展）

ベースに古筆を感じる作品です。「なるほど、この方は古筆〇〇の、こんな面の美しさをベースにして制作されたのだな」と勝手な思いで鑑賞するのです。

II 共通の故郷

その感じ取った古筆〇〇の趣が、自分も好きな古筆で、日頃自分の書作の拠り所としている古筆と同じだったら親近感が湧いてきます。自分が好きな古筆をこの方も勉強している、私と同じものが好きな仲間なのだと思えるのです。そして、共通の「書美の憧れ」を持つているのだなと思うと、その作品が深く理解できたような気分になります。初対面の方でも話すとき、同郷で、共通の「故郷」を持つっていると判ると急に親近感を覚えるのと似たような感覚です。

また、その方の作品から、自分は理解できていない、気が付いていない古筆の魅力を、このような表現にしているのかと気付かされると「なるほど！」と感心してしまいます。自分の古筆勉強の不十分を知り、新たな書作法を教えてもらえたような、有り難い、嬉しい気持ちにさえなるのです。

■プロフィール



岩永 栖邨（いわなが・せいそん）
本名 高久（たかひさ）
雅号 「栖」は出身地鳥栖から、「邨」は師匠からいただきました。

（略歴）

昭和25年 長崎県生まれ、高校生まで佐賀県鳥栖市に居住

昭和47年 福岡教育大学特設書道科卒業

昭和47年 兵庫県高等学校書道科教員として採用される

昭和55年 榎倉香邨氏に師事
(奉職33年)

平成17年 書家を志し教職員を早期退職

平成21年 書道香櫻会理事長に就任

平成25年 公益社団法人日展会員に就任
平成25年 兵庫県書作家協会理事長に就任

令和4年 第9回日展にて審査員を務める
(3回目)

（役職）

日展会員・日本書道文化協会理事・読売書法会常任理事・日本書芸院常務理事・兵庫県書作家協会参事・書道香櫻会理事長

III これは何だろう？

一方で、目には強く飛び込んでくるのです
が「うーん？」と思う作品もあります。「こ
の作品のベースの古筆は何だろう？」と考え
て観るのですが、何も感じ取れません。こん

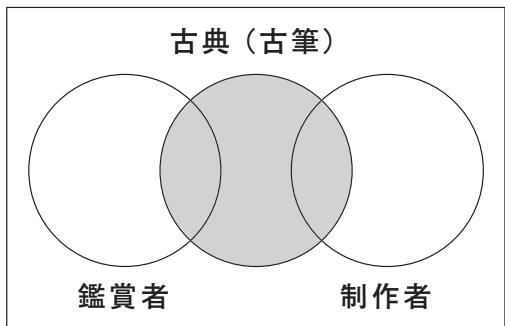
な場合の多くは自分の不勉強と感性の無さが
要因なのですが、一つにはその制作者が古筆
に依拠しない独創的な作り方をしている場合
もあるでしょう。そうなると「何だろう、こ
れは？」「この造形はどこから来るのだろう？」
と悩んでしまい、腑に落ちない不安感のよう

なものを覚えます。せっかく折角話しがけてもらつた

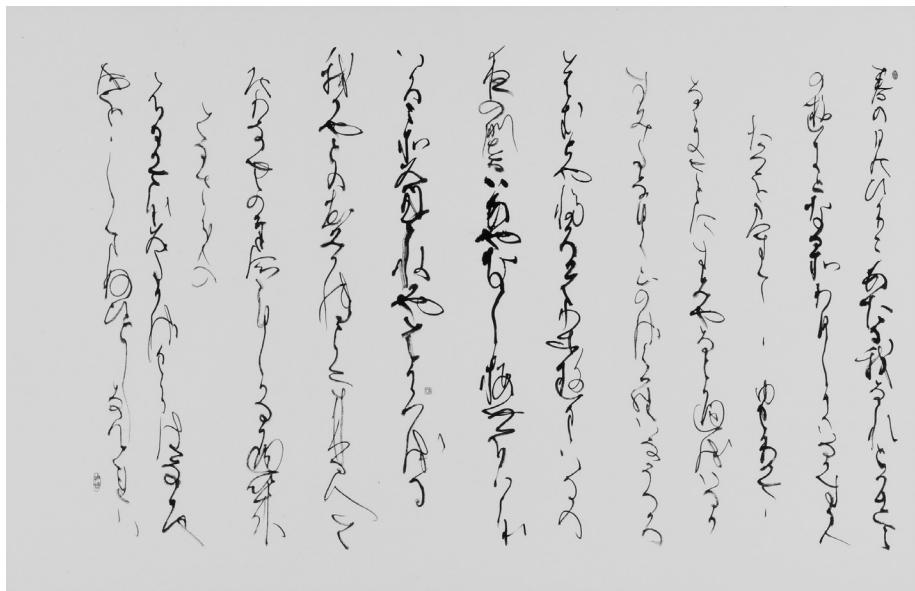
のに、話の内容が判らず、意思疎通ができない
かったような残念な気持ちで作品の前を去る
事になるのです。

IV 古典は思いの架け橋

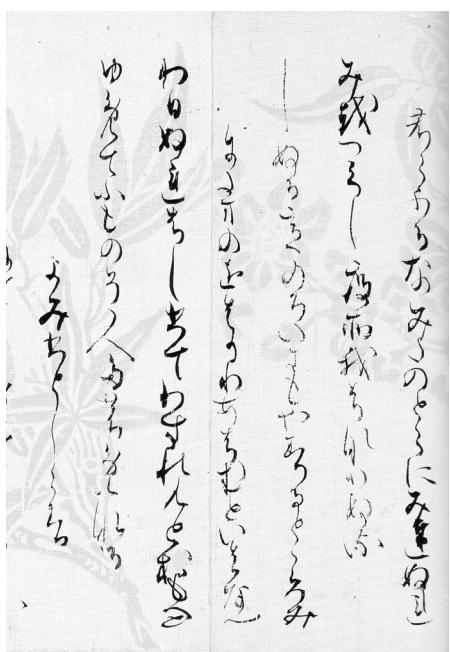
このような考え方から私は、古典（古筆）は
鑑賞者と制作者との間を結ぶ「思いの架け橋」
(イメージ図参照)のようなものだと思つて
います。制作者は、自分が好きな古筆の特徴
的な表現を借りてこんな美しさを出してみた
いと「思い」を込めて書く。鑑賞者は、その
作品から伝わってくる古筆の趣から、なるほ
どこの古筆のこの表現を借りてこんな「思い」
を込めて書いているのだと作品意図を知る。



「思いの架け橋」イメージ図



作品1 「春景」 120cm×210cm (2020年)



本阿弥切

このようなやり取りが、古筆が仲立ちすることとで出来るとと思うのです。両者の間に古筆が無ければ、このような「思いの受け渡し」は難解なものになるでしょう。

更にもう一つ、その古筆を制作者も鑑賞者も好きであることが必要です。制作者が思いを込めて書き、鑑賞者がその古筆を感じ取つたとしても、鑑賞者がその古筆を好きでなかつたら心に響いて来ないでしょう。同じ「書美への憧れ」を持つ仲間であることが意識され

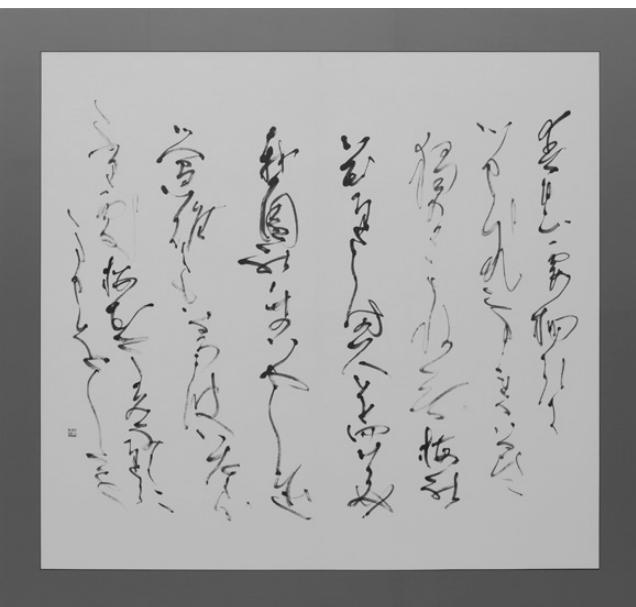
ることが肝要なのです。
制作者は鑑賞者がどんな古筆を好みとしているかは判りません。何を感じ取つてもらえるか、どんな評価をしてくれるのかは鑑賞者任せです。制作者にできることは自分が好きな古筆のこの美しさと共に感じて欲しい、自分が憧れる書美はこんなものだ、とただ念じて書くことに尽きます。私も「なるほど！」と思つてもらえるような作品が書きたいと願いながら、日々古筆を学んでいます。

V 何か伝わりますか？

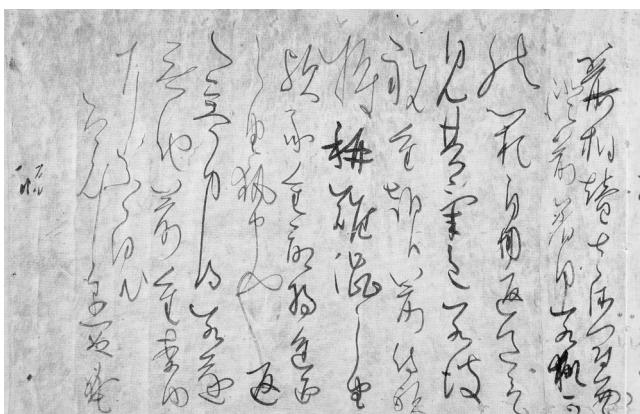
さて、十頁の作品1をご覧ください。この作品は「本阿弥切」のコロコロとしたリズミカルな動きや、一行中の文字の大小、疎密の変化を模して書きました。また、行間に広狭の変化をつけ、中央部に盛り上がる潤筆の集団を作ることを意識しました。畳み込むような量感と墨と余白の美しい調和を願つて書いていますが、「本阿弥切」の趣を感じ頂けますでしょうか。

作品2は藤原佐理の「恩命帖」をモチ

フにしています。佐理の書状は漢文ですのでかな古筆ではありませんが、好きな古典として觀てています。大胆な造形に魅せられますし、その和風を感じさせる伸びやかな線は正にかなとして書いてみたい線です。「卒意の書」といわれる佐理の自然さや大らかさに近づきたいと願つて書いています。



作品2 「春日山」 180cm×184cm (2014年)



恩命帖

さて次号では私が古筆をどのように観て制作に活用しようとしているのか、師匠 榎倉香邨先生の教えを元にお話したいと思います。